

近江商人の知恵と理念を現代に生かす情報紙

さんぽう

三方よし

第40号

2015/2

特集●連続公開講座報告 近江商人の謎に迫る

「近江商人の歩いたあとにはペンペン草も生えない」

「売った蚊帳には天井がなかった」

「近江泥棒に伊勢乞食」

などと揶揄されてきた近江商人ですが、近年、近江商人の商いの理念「三方よし」が見直され、現代に通じる近江商人の企業理念が再認識されてきています。

CONTENTS

連続講座(1) 日野商人の謎に挑む……………	4
連続講座(2) 近江商人のルーツ・ 中世の小幡商人の謎……………	7
連続講座(3) 気骨の八幡商人魂……………	10
連続講座(4) 東北・南部藩を支えた 高島商人……………	13

ところが、近江商人の実像について、
まだまだ分かっていないことが多いのです。

解明されている事実は何か

何がまだ不確定なのか

調査が進んで見えてきたことは何か

これらを確認しながら、地域の近江商人ファンとの交流をふかめつつ、ともに考えていこうと公開講座を開催してきました。

いよいよ、これらのまとめの講座を3月に開催します。本紙では、これまでの講座の様子を紹介します。

■連続公開取りまとめの会 開催日など詳細は最終頁をご覧ください。





こんなことが知りたい 近江商人の謎



何人いたのか近江商人!!

近江商人は堅実で永続的な経営を行ってきたことから全国各地で活躍しました。さらに活躍した時代も長く、江戸時代以前から明治時代にまでもその足跡を知ることが出来ます。広域に、長期にわたって、多くの商家や商人がいたことと考えられます。それではいったい何人ぐらいの商人がいて、何軒の商家があったのでしょうか。

このことは未だ正確な数字は判明していませんが、次第に全容に近づいていくようです。左の近江商人分布図は大変有名で、多くの書物に掲載されています。ただこの分布図の元になった調査は、いまから50年以上も前のこ



近江商人発祥地域を現した地図。○の大きさを出身者の人数を示しており、湖東地域から生まれた商人が最も多いとされてきました。

とで、必ずしも正確ではないのです。今回の連続講座では近江日野商人館満田館長から、表示の誤りが指摘されました。果たしてその後の調査結果はいかがだったのでしょうか？

天秤棒で運んだものは何か？

写真は近江八幡西川家の玄関脇の天秤棒かけです。西川家は現在、近江八幡資料館として公開されており、重要文化財の指定を受ける商家で、近江八幡の御三家の一つでした。豪商に



近江八幡資料館に現存する天秤架

なっても創業当時の苦労を忘れないようにと大切にしているのが天秤棒です。

近江商人の定番として道中合羽(引き回し)や編み笠とともに天秤棒は行商姿として描かれます。ところが問屋の機能を持った近江商人の商品は、このようなもので運べるぐらいのものはありません。商品の運搬には船や馬を使い、天秤棒は近隣の販売には使用したものの、遠方への行商時には、商品見本や手形、雨具などを天秤棒で持ち歩いたのです。つまり、天秤棒はいままでいうビジネスバックの役目を果たしていました。

歩いた跡にはペンペン草も生えないってどうゆうこと？

現在でも、優秀な営業担当者はライバル社から、このように言われ、大変警戒されます。つまり、市場の商機をすべて掻っ

公開講座●「近江商人の謎に迫る」開催趣旨説明



三方よし研究所
公開講座委員会委員長
高橋 卓也

NPO 法人三方よし研究所には全国各地、いろいろな層の人たちから、さまざまな問い合わせをいただいております。

「近江商人について知りたい」「もっと勉強したい」などという熱い期待が寄せられています。それに対応するために、さらに研究を深める必要がある。と考えて今回「近江商人の謎に迫る」という非常に大上段に構えたテーマで連続講座を開催しました。

さらに、ほかには、実際に商売をしている研究所会員から、「本当のところを知りたいんだ、きれい事ではない本当の、生の近江商人を知りたい」という声にも対応したい。ということも今回の講座の目的でもあります。

そして一番重要と思われるのは、近江商人の経営理念の顕彰、普及事業が始まって20年を経過しています。その間、社会情勢が大きく変化し、経済状況も大きく変わる中、当

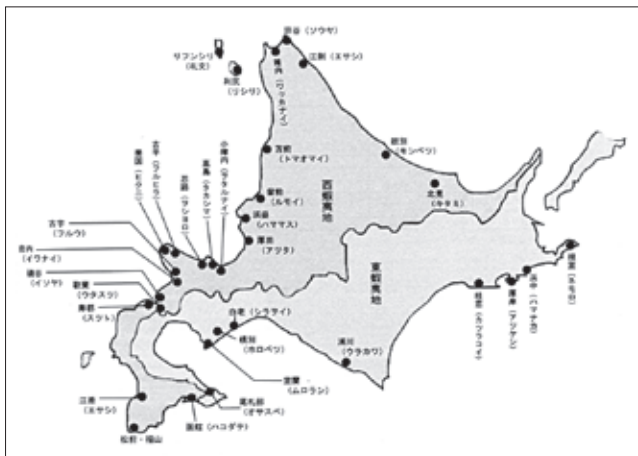
然、近江商人に関する調査研究も進んでいます。ところが、発表の機会が少なく、いつまでも従来の情報が近江商人のすべてであるとされています。第1回にご講演いただきました満田館長は、とりわけ資料に忠実に常に新しい資料と向き合うことが大事だということで、今回の情報誌についても講演時からさらに進展した研究の成果を寄稿いただきました。

満田館長をはじめとし、現在も近江商人に関する研究が、いろいろなところで行われています。その最新の成果を、多くの人たちと共有したい。ということも今回の連続講座の大きな目的です。

日野、五個荘、八幡、高島と巡回講座を開催してきました。本誌ではその内容を集約したものを掲載しましたが、3月には、全体のまとめをしたいと考えますどうぞお楽しみください。

取りまとめ講座いよいよ3月22日に開催。

詳しくは本誌最終頁のご案内をご覧ください。



北海道の八幡商人の足跡地

攫うほど近江商人が商い上手であったことを誇張したのがこの言葉だと思われまます。
実際、近江商人は、商品を掛売で販売しており、次回の訪問時に商品代金を精算したので、近江商人からの購入を禁じたり、また締め出されたりもしたようです。では、その実態はどうだったのでしょうか。「千両店」を次々立地していった日野商人の事例で紹介されています。

に各地で商いが出来た近江商人は、近江の領地が細分化されていたことにその要因があります。が、鎖国前に海外に渡航したり、未開の北海道で漁場開拓を行う一方、東北や江戸では、城下町建設に尽力しています。こうした商人の行動は、各地の藩主や武士とのかかわりと無縁ではないことがわかってきています。「武士は敬して遠ざけよ」という家訓がある一方、武士とのつながりが少なくはなかった近江商人、幕藩体制時代をどのように生き抜いてきたのでしょうか。武士との関係はいったいどのようなものになっていたのでしょうか。それぞれの講師からお聞きできました。

高島に商人の足跡が残ってないわけは何か？
近江商人は「江戸時代に発祥した商人であり、本宅を近江に置き、諸国産物回しという商いの方法を行った商人」と定義されています。そして近江八幡や日野、五個荘、豊郷には本宅の痕跡が残り、近江商人ゆかりの町と



旧街道沿いの古民家「高島ビレッジ1号館」で開催された高島会場



自主独立心旺盛な八幡商人の志は現在の八幡の街づくりに生きていることが示された近江八幡会場。

して知られていません。ところが何の痕跡もないのが高島商人発祥地の高島市です。高島からは、盛岡を中心とした土地に出向き、かの地に住み着き、現在も盛岡を中心に多くの近江商人の末裔の人々が政財学界で活躍しています。いったいその理由はなんだったのでしょうか。窪田先生のお話から真実が浮かんできます。

連続講座(1)

日野商人の謎に挑む

—近年の調査結果から—

日時：平成26年1月26日
 場所：日野町公民館
 講師：近江日野商人館館長 満田 良順 氏



日野の人々に敬愛される蒲生氏郷の像

蒲生氏郷転封起原説と日野腕の歴史

松坂や会津若松には現在も「日野町」という町名が存在するなど、日野商人の足跡は全国に残る。単身赴任が原則のお店行きを象徴する「関東後家」という言葉は日野で生まれ、かつて、主人留守宅の玄関には男物の下駄が在宅を表すように置かれていたという。では、日野商人の実態はどうだったのか、またその発祥の要因は何か、日野商人研究を現存する資料から丹念に進める満田館長の熱弁が続く。

日野商人の起原説については、戦前より、日野城主の蒲生氏郷の松坂、会津への転封がきっかけで活動が始まったという「蒲生氏郷転封起原説」が通説となり、ほかには江戸時代中期に登場したという江戸中期登場説があります。

「蒲生氏郷転封起原説」については、

ては、「日野は会津92万石の領主となつた蒲生氏郷の故郷であり、薬市令が敷かれ、商工業が栄えた。氏郷の伊勢松坂や会津への転封後も、蒲生氏と日野町民との関係は、行商を通じて密接であった」(同志社大学『社会学』)という説が有力ですが、氏郷が伊勢松坂へ転封になったの

は、天正12年(1584)で、そのころに伊勢と近江、日野との間を行商していたとなると、高島商人や八幡商人よりも歴史が古いということになります。

一方、平成24年に刊行された『近江日野の歴史』にも「(氏郷転封起原説)は全くの虚偽とすることもできないだろう。また日野商人は氏郷に従って移住した人々を頼りに、奥羽地方へと行商に出掛け、商圏を拡大したとも伝えられているが、その可能性は高かったと思われる」と日野商人は氏郷に従って移住した人々を頼りに、商売を始めた」とされます。

日野腕の歴史と日野商人

いづれにしろ、氏郷の政治が非常に素晴らしかったことが所以のことでしょうが、その裏付け史料は秀吉の朱印状がある

江戸中期説では、薬の町になり、全国に販売することで商人が登場したとされますが、この時代でも、お腕の方が全国にたくさん売られていたのです。

これまで、近江商人の人数分布図では、五個荘が一番多いとされています(2頁分布図参照)が、近年の調査の結果から、時代別出店者数は日野商人が一番多く、

ぐらいです。

いづれにしろ、戦前の歴史観が氏郷を英雄視することで生まれたのでしょうか。40歳で非業の死を遂げた氏郷は、実力、人気ともに非常に素晴らしい人であったように、戦前の日野町には氏郷の銅像も早くに立てられました。

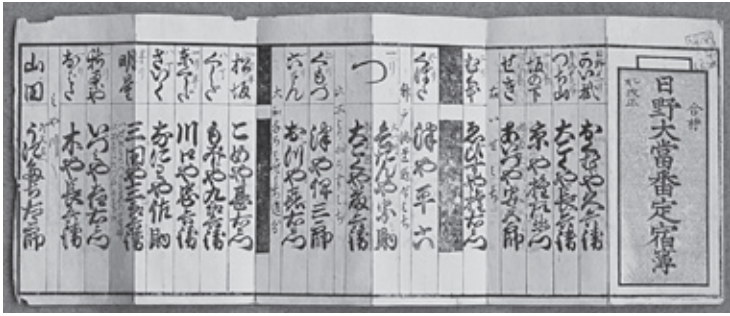
氏郷起原説が生まれたもうひとつの理由は、初期の日野商人の扱ひ商品についての事実関係が不明瞭だったことがあります。つまり、日野商人の出発点は日野腕の行商に始まっていますが、江戸時代中期の全町火事で日野腕の歴史を解明する資料が焼失しています。既にその時、日野腕の歴史が明確でなかったことから「氏郷転封起原説」が有力になったと考えます。

1012店が確認出来ます。従来、日野商人の出店は、約250店舗とされていますが、これは昭和5年に全国一斉調査をした結果で、その後、さまざまな情報から新たな発見があり、商人の数も一番多かつたようです。

記録によると、日野商人が初めて登場するのが、1626年で、八幡との時間差はなく、江戸



全国に特約店を広げた「万病感丸」の看板



開放的な日野大當番仲間の常宿簿

新しい日野商人起原説―氏郷の転封でさびれた日野のまち―

江戸初期から盛んに製造された日野椀を日本全国に行商に歩いたことが日野商人の起原である

室町時代の初めの日野町十棹寺の記録に、「税を免除された

初期から活動していたのでしょ。しかも、元禄3(1690)年に日野商人の組合、「日野大當番仲間」を組織しています。正徳2(1712)年には、日野商人380人余りが、関東国々10カ国程へ椀売りに行っています。さらに、当時、日野商

人の主要商品である日野椀をつくる職人が大窪町に390軒、村井町に105軒などを合わせて875人の家の主が、お椀産業に従事していました。つまり、日野商人は、江戸初期からすでに活動しているのではないかと推察します。

ひもの(椀物)の屋敷がある」と書かれています。椀物というのはヒノキもので、塗りの漆器か、あるいは曲物か木工の食器がつくられて、税を免除されています。これは蒲生氏郷の8代前の領主が治めている村です。おそらく、産業を盛んにするための減免であったと推定できます。応永3(1396)年以前には「日野市」という定期市が開かれています。定期市は、「上市」と「下市」に分かれ、上市には惟喬親王を、下市には市神を祀っています。

野商人が生まれたのではなく、蒲生氏郷の転封によって、日野の町が荒れ果てたという見方が出来ます。蒲生氏郷の転封さえなければ、もっと違った歴史の展開があったのではなからうかと思えます。江戸時代に入ると、元和年間(1615~1623)に塗師屋15名が塗師町(現在の双六町)に移住させられています。これは私は、「第二次椀産業」の始まりと捉えており、日野椀を行商に歩く商人として、日野商人が登場してきたと考えています。寛永15年(1638)、『毛吹草』に「日野の特産物として『五器』が記載されています。椀産業が日野で盛んに行われているという事です。『毛吹草』は、京都の商人が書いているので、このころすでに、京都に日野の椀が売られていたと推定できます。

承応元年(1652)、「因幡国」(現在の鳥取県)から日野椀の材料の木地を大量に安定的に供給を開始し、明暦年間(1655~1658)には、「日野椀之中興」というような言葉が出てきて、第一次椀産業が衰えて、第二次椀産業が非常に盛んになってきたことを示します。元保元年(1830)年ごろに、「最後の椀づくり職人がいなくなった」という記録が見られ、業産業の台頭で日野椀が衰退しますが、室町時代の初めにはじまり、約400年の間、椀がつくられてきました。旧永源寺町(現東近江市)蛭谷、君ヶ畑に「氏子駄帳」という記録が残っていますが、毎年日本全国の椀職人の間を回って寄付金を集める「氏子駄」を行っていました。ここから寛文5年(1687)には伊予(現在の愛媛県)松山の細谷木地屋、寛文10年(1672)には丹後の国、元禄元年(1688)、宝永4年(1707)、には因幡(現在の島根県)に行っていることがわかります。そのほか、信濃とか美作、甲斐も見られ、かなり全国広いところに日野の職人が、ウルシや木材を求めて移動しています。江戸時代の初めに、日野は火縄銃の産地でもありましたが、椀木地を運ぶ船に火縄銃の材料の砂鉄が積みこまれたのではないかと類推できます。中国山地から砂鉄が非常にたくさん採れますので、日野椀の原料とともに火縄銃に使う砂鉄が運ばれてきたのでしょう。

業製造の隆盛と日野椀

日野商人の活動

群馬県の西牧関所の資料には大変細かい記録が残っていますが、ここに日野商人が通った足跡がたくさんみつかりました

近江日野で大量生産された椀が「荷物十三駄」、つまり13匹の馬を引き連れて行っている日野商人が見られました。通行記録とはべつに、群馬県の資料には、奉行所が「日野商人から物を買うな」という指令が出して、日野商人を閉め出していました。日野商人は、販売方法にも工夫して、収穫時に代金の決済をする方法で商品を販売したので、購入する農民の借金が溜まり、最終的には田畑を売らなければならぬ羽目になるので役人は日野商人を排斥しようとしたのです。仙台藩でも同様のことがあった資料が出てきました。

「先年より他領商人罷越候処 其内近年甚だ盛んに商売仕り 頗る民間の痛み候者ハ 江州辺より罷越商人共に御座候 合葉小間物と取合せ 木綿絹布の類持参仕り 手代等の者数十人に相分 御領内在々大かた不残貸売り仕候儀に相聞申候 (中略) 近年 右の貸売大に盛に相成 一ヶ

所にて十両二十両 或いは四五十両に相至り候処も有之 頗る相痛み申事に御座候」。

日野商人は、関東平野の奥地で商人が余り行かない地域を訪ね、農民あるいは漁民という貧しい人を対象に一番安物の椀を売りに行きました。庶民がこういった塗り物を使い始めたころに、日野では大量に庶民用の椀がつくられていたことが判明しており、これを日本全国の田舎へ売りに行ったのでした。

山梨県立図書館所蔵文書には、「ある日突然、江州日野から旅人がやってきて、馬にたくさん椀を積んで持ってきて、それをお宅の店で取り扱いませんかと、いうようなかたちで来て、それを引き受けて、椀を売り始めた。江州の方で60軒余りの小売店にその椀を卸している」と書かれています。

近江商人の多くが小売ではなく卸売りであるのと同様、日野商人も1軒、1軒の家に椀を売るのでなく、ほとんどが卸売りで、日野の業も卸行商みtainなものです。

富山の業売りは、配置売業ですが、日野の業の売り方は、人

の集まりそうな商店あるいは宿屋などに、業を置き「自由勝手に売ってください。その代わり、玄関先に日野の業の看板を掛けさせてください」というように売るのは他人に任せる販売方法を行っていました。

日野の定宿

日野商人の定宿は、個人が選んだ定宿ではなく、大当番仲間が、全国各地の宿場町に指定した組織的な宿で、他の商人の定宿とは区別され、北は福島県から南は大坂までに設けられ、安く泊まれるだけではなく、商いと流通のネットワークになっています。

日野の椀を群馬県で売りたいときに、自分で運ぶのは大変ですから飛脚屋さんに頼む。そのときに日野商人の定宿に運んでおいてくれるシステムです。自分ではてんびん棒1本だけ担いで、その便でまた歩いて行くという、そういうかたちで定宿が使われておりました。

地方で活躍した日野商人

八幡商人とか五個荘商人は、時代は違いますが、大都会の目抜き通りで商いをしています。ところが、日野商人はあくまで、地方都市の酒屋のおやじさんで

す。いくら大金持ちになっても日本の経済を動かすような商売をした日野商人は見つからず、地方で活動していました。

さらに、ほかの地域の近江商人と大きな違いは、日野商人の扱い商品の生産が地域社会に大きな影響を及ぼしていることです。八幡や五個荘と異なり日野では、中心的な産業の製業は、粉薬を紙で包む、あるいは丸薬を袋に詰めるという面倒くさい仕事を、農民とか町民の家で、夜なべ仕事でできるわけで、現金収入が地域全体に影響を及ぼします。八幡などのように、せいぜいが大店に就職するという程度の地域経済効果ではなく、町全体に現金収入がもたらされたので、日野では、現在の貨幣価値で4千万円ぐらいの曳山を作ることが出来たのです。

「出店経営の特徴と商法」

日野商人は醸造業を中心にしておかつ漆器を持っているというのが一つの特徴です。

これは、日野商人が群馬、埼玉、栃木の3県だけでも、江戸時代に約500店舗の店を展開しています。ほとんどが造り酒屋、あるいは醤油、味噌、酢をつくる醸造業です。

酒や味噌を工場生産し、別

に店を設けて、そこで味噌などを売ったのですが、同時に必ず質屋を行っています。近江からいきなり関東平野で店を持つわけですから、地元の信頼を得るためには、いわば村の郵便局のような存在として、ここで生活の情報を入手したのです。

日野商人がほかの地域の近江商人と大きく異なるのは、「日野大当番仲間」と呼ばれる組合を形成していることです。江戸時代に日野大当番仲間には、組合員の会員証としての看板がありました。表に「日野大当番」と書かれ、偽の組合員が出ないように、「江州日野商い仲間往来印」と書かれています。「往来印」でするので、全国で行商とか商売をするときに、これを懐に忍ばせて行くと、身分証明書になるのです。

裏に組合員の名前が書かれ、通し番号も入っています。日野大当番というものの、五個荘や八幡、あるいは京都からもさまざまなメリットが利用できるから、日野大当番に加盟してくるのです。組合費は非常に安く、組合費さえ払えば組合員になれるという利益独占団体ではない組合を持っていたのが日野商人の特徴です。(満田氏講演終了)

連続講座 (2)

近江商人のルーツ・
中世の小幡商人の謎

日時：平成26年3月15日

場所：東近江市近江商人博物館

講師：東近江市近江商人博物館学芸員 林 純氏



中世の商人の実像

近江商人としての歴史は一番新しいとされる五個荘商人であるが、実は、多くの近江商人のルーツは、東近江市小幡にあるという。戦乱の地となった近江の歴史の背景や地理的条件が中世以降、商いのベースがすでに生まれ、海外との交易も早い時期から行われていたという。江戸時代以前の近江の商業事情を近江商人博物館での長年の研究成果を踏まえて、林学芸員が紹介。

近江商人博物館に中世の商人の姿を現したジオラマがありすが、横山景三やフロイスが見た中世の商人像から作成しています。

横川景三が、応仁2年(1468)「荷を担ぐ人夫は百人あまり、警護の武士は6、70人、荷物を載せた駄馬はその数を知らず」(『小補東遊集』)と目撃した山越商人のことを書いています。また、織田信長の招きを受け、岐阜の城下町へ訪れた宣教師のルイス・フロイスが、『耶蘇会士日本通信』に「其の出入りの騒がしきこと、バビロンの混雑に等しく、各国の商人、塩布その他商品を馬に付け来集し家は雑踏にして何も聞こえず」と書かれており、これらから、非常に盛況に、活発に、あるいは、慌ただしいような感じの商業が、中世には存在したと考えられます。

日本では10世紀に貨幣が中国から大量に輸入されるようにな

り、商業の発達とともに、貨幣の需要が高まり、多様な流通形態が発生し、商業の在り方も複雑化してきました。そして、鎌倉時代の後期以降、特に近畿地方の各地で、百姓層の集住化が進み、地縁、血縁的なつながりを深めた「惣」が出現します。惣は、乙名と呼ばれる、長老層たちが村を支配するようになり、平等原則の中で連帯意識により結合し、自治意識が高まった集落へと変わっていきます。東近江市の421号線沿いの「得珍保」という集落は、商業に従事した者が多く、彼らは「保内商人」と呼ばれました。この村の今堀日吉神社には中世商業史研究に重要な『今堀日吉神社文書』(重要文化財)が残り、当時の商人の動きを知ることが出来ます。

この史料に「商売道の古実」と書いてありますが、「諸国の津

中世商業の原理と流通システム

と書いてありますが、「諸国の津



重要文化財の中世商業資料を有する「今堀日吉神社」

湊には、それぞれそこで商売する権利があり、扱う商品は多くあるが、個々の商品に座があつて、その座のものしか扱えない。市売や里売まで、全て商売道の古実と決まっている」ということです。

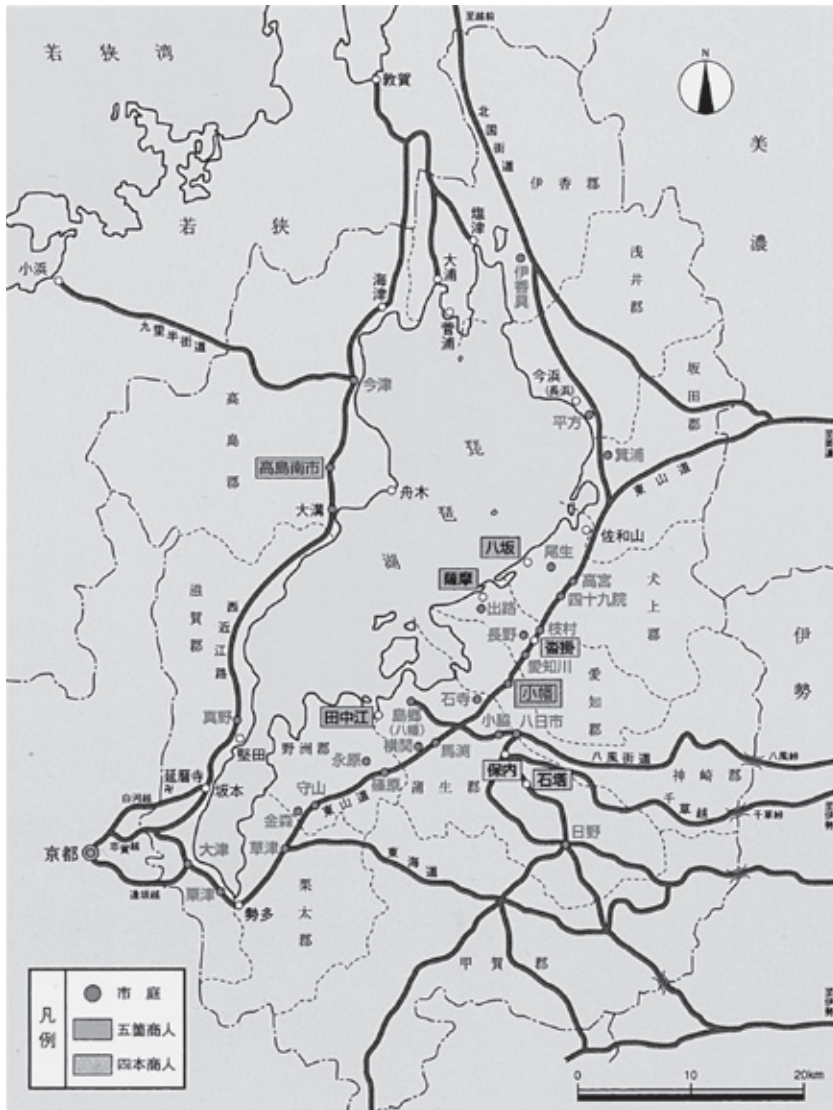
商品ごとに、あるいは、商いする場所ごとに権利があつて、その権利を持つ座のものでなければ、その商いができないという、中世商業を端的に表現している言葉です。

中世では日本全国、あるいは近江全体を支配するという領主がいませんでしたので、各地の領主や自治組織が、街道や港に関所をたくさんつくり、通行料を徴集することが大きな財源と

してました。このことに対抗した商人たちは、商人団や座を組織して、「市津料」「市庭沙汰用途」をまとめて領主に払って、それで通行権や営業権の保証を領主にもらったのです。

小幡商人の活躍

湖東地方から伊勢方面に商いに行く商人を四本商人、あるいは山越商人と呼び、小幡商人、蒲生町の石塔商人、愛知川・愛荘町にいた杏掛商人、今堀日吉の保内商人、この四つのグループが伊勢への商いをする権利を持ち、八風街道、千草峠を通過して、伊勢に向かい、麻糸、紙、木わた、陶磁器、曲げ物、油を取る菜種、胡麻、わかめ、一切の鳥の



中世近江の市庭(いちば)と商人分布図

物、のりの類い、一切の魚、伊勢布を独占的に扱いました。そしてこの時期、五箇商人というグループがありました。五箇荘町の五個ではなくて、五つのグループという意味で、小幡商人、彦根の八坂商人・薩摩商人、近江八幡の田中江商人、琵琶湖を挟んで対岸の高島の南市商人が属し、若狭方面の物資を仕入れて、琵琶湖から、京都へ

運ぶという権利を有する商人でした。その独占的に扱える商品が塩化物いわゆる塩魚です。小幡商人は、この二つのグループに属し、しかも、商人を相手に売る卸売りと、村人相手に売る小売と両方を兼ねているというところで、近江一円で商売ができるし、誰にでも売ることができるといって、非常に圏域の広い特権を持っていました。

保内商人の台頭と相論

ところが、この小幡商人に対抗してきたのが、今堀日吉神社を宮座とする保内商人で、「伝後白河天皇宣旨案」といわれる後白河法皇のお墨付きをいただいているわれわれに権利があることをたてに、他の商人の権利を奪ってきたのです。

保内商人たちは相論、裁判を

その領主である佐々木氏、あるいは比叡山に訴え出て、次々と勝ち進み、保内商人以外の商人はほとんど権利を失っていったのです。

相論は、相手の主張もちゃんと残しています。保内商人が中世には最後に勝ち組になってしまったというのが実情です。ところが、保内商人の財力、権力に目を付けた領主の佐々木六角氏が自分の城下、観音寺城下に住まわせてしまうのです。

この観音寺城の南側の石寺集落に鎌宮奥石神社がありますが、その辺の近くに石寺新市という

中世商業の変質と終焉

安土城下町と織田信長の経済政策

さらにもっと大きく変わるものが起きます。天正4年に織田信長が全国平定をもくろんで、安土城をつくります。山頂には巨大な天主を巡らせて、郭を山の中にいっぱい設けます。その安土城の南側の湿地帯を埋め立てて城下町を築きました。

織田信長は有名な安土城の城下町中に、『安土山下町中掟書』というものを天正5年に発布しております。ここには、「城下町に居住するものは、座や諸役

場所があったようです。そこへ、佐々木六角氏が保内商人を強制移住をさせ、全権力、財力を取り込んだのです。人から恨まれると結局駄目になるといような事例かもしれないです。

後の調査の結果、この文書は、偽文書で、自分たちの権利を主張せんがために、こういう偽物をつくって、保内商人が商売を進めていったのです。

現代にも通じる感じがします。捏造、リコール隠しに通じるようなやり方が昔でもあったのかと思います。

諸公事、座、組合に属する必要がありませんよ」と記しています。「諸役、諸公事」とは、いろいろな税金や、臨時課税は掛けませんよということで、いわゆる「楽市楽座令」で、誰でも自由に税金なしに商売ができるというものです。さらに、商人の城下への強制的に立ち寄ることを求め、東山道に通ずる下街道を敷いて、東山道を通ること

を禁じ、必ず安土に寄りなさい」とし、「喧嘩、口論、押買、押売等の禁止」しています。商人にとっては税金は掛けな

い。誰でも自由に商売ができる。治安は安定している。非常に商業をするのに都合のいいところが出てきましたので、中世的秩序の中で商売をしていた四本商人、五箇商人たちは、ほとんどが安土城下に集約したのです。

八幡城下町と豊臣秀吉の経済政策

ところが、織田信長は天正10年(1582)に本能寺の変で、志半ばに倒れ、安土城も灰燼に帰してしまいます。その後、豊臣秀吉は、近江の国を支配する目的で、甥の秀次に、天正13年に八幡山城を築かせています。もともと非常に寒村だった八幡に八幡山城を築き、その山裾に武家屋敷を設けます。

その南側の平地のところに、碁盤の目状のまちづくりをして、商人、町人たちを集めるに住まわせます。町人が住むところと、武士が住むところの間に、八幡堀という堀を巡らし、この堀は琵琶湖に通ずる水運の拠点になるとともに、侍身分と町人身分を分ける身分制度をシンボリックに象徴する境という役割を担っていました。

安土城には商人は全て東山道を通らずに下街道を通れというような通知が出ていますが、八幡城も琵琶湖を通る船は必ず八

幡堀を通れという通知が出ており、強制的に通行しなさいというようなことで、商業の充実を図っています。

八幡城下は当時としてかなり進んだ城下町でしたが、豊臣秀吉に実子ができずと、秀次は邪魔者になり、高野山で切腹を命じられていますし、八幡はお殿さまのいない城下町、天領に変わってしまいます。関ヶ原の合戦の後には本場に幕府直轄に変わってしまいます。

ですから、城下町だったところが、お殿さまのいない在郷町、八幡町に変わってしまいます。八幡の城下町で、安土に集められた商人たちが今度は八幡に移り住んで、城下町商人をしていたと考えられますが、その人たちの最大の顧客であったお侍さんがいなくなったという状態となったのです。

近江商人の登場

近江八幡市に、小幡町という地名があり、ここには小幡商人だろうと思われる人たちがたくさん移住しています。

例えば、最上屋と称する西谷善太郎、あるいは、綿屋と称する西村嘉右衛門、麻屋という屋号を持つ市田清兵衛家、扇四の中村四郎兵衛、中村屋という屋

号の曾我石三郎兵衛、等々が現在の小幡、あるいはその周辺に住んでいたといえます。

由緒ある方々なのですが、こういう人たちは八幡町が開かれたときぐらいに、早くに八幡町に進出して、城下町商人となりました。ところが、八幡町はいわゆる在郷町になり、そこにいた商人たちは路頭に迷ってしまったという状態となりました。

慶長5年の関ヶ原の合戦以降は武士がいなくなったので、城下町にいた商人たちは、活路を、どんどん人口が増え、整備が進められていた江戸に求めたのです。あるいは他国稼ぎ商人となって全国へ展開していきます。

例えば、創業450年ほどの西川産業さんは、江戸時代から現在まで東京日本橋にあります。八幡の本店という言い方をしますけれども、日本橋には近江に本部を持つ八幡商人たちが、江戸時代初期に出現しています。

廃城という、非常な危機を他国展開していくという近江商人の方向性、活路を見いだしていったのが近江商人のルーツの一つですが、その根元を広げると、安土の城下町、さらには東近江にたくさん住んでいた中世の商人、なかんずく小幡商人たちの足跡が、そこに感じられます。

安南に出かけた西村太郎右衛門

近江八幡市の日牟禮八幡宮に『安南渡海船額』という絵馬が所蔵されています。舟のちようど右端に屋形が描かれていて、その下のところに、頭巾をかぶった男の方がおられると思いますが、これは小幡出身の西村嘉右衛門の次男、西村太郎右衛門という方です。

朱印船貿易で、安南、いまのベトナムに交易に行き、安南で商売をしていて財をなされたのですが、寛永12年(1635)に日本の幕府は「鎖国令」を出したことで、安南や海外に展開していた商人たちも帰れなくなっていました。

この西村太郎右衛門は、正保4年(1647)、鎖国が出てから数年後に長崎に帰ってきたのですが、上陸が許されず、泣く泣く望郷の念を持って、「私は安南でこのように立

派に成功しましたよ」ということを、ふるさとの人たちに見てもらおうとこの額を絵師に描かせて、ふるさとの日牟禮八幡宮に奉納されたということです。

太郎右衛門の顕彰碑が、いまでも八幡山に残っております。日本の土を踏むことはできなかつたのですが、八幡山城が廃城になって、活路を日本国内に向けてはならず、海外にまで目を開いて、外国との貿易に自分の可能性を託されたということが分かる一つの例だと思っています。

近江商人というのは非常に保守的な面を持つ一面で、こういう先取の気性というものがあるのかと思います。八幡商人はまさしく、その特徴の発露なのかなとも思っております。



日牟禮八幡宮の「安南渡海船額」



八幡山に西村太郎右衛門の顕彰碑

連続講座(3)

気骨の八幡商人魂

—受け継がれる自主独立精神—

日時：平成26年5月17日(土) 場所：近江八幡市「酒游館」

川端五兵衛氏：株式会社ダイゴ会長、元近江八幡市長。青年会議所時代、八幡堀の復活に尽力。著書『まちづくりはノーサイド』
尾賀康裕氏：株式会社尾賀亀代表取締役。ハートランド推進財団理事長として、近江八幡独自のまちづくりを目指し、市民による自発的な活動を支援。
進行：岩根順子氏。三方よし研究所専務理事。



徳川政権の下、天下の動静に影響を与えるほどの豊富な資金力と個人の強い倫理観をもった八幡町の気骨ある商人魂を描いた小説『お上にたてつき候—近江商人たちの熱き闘い』の背景となった八幡商人の実像に講師3人による鼎談で迫ります。

八幡商人は問屋制家内工業の促進というところで、蚊帳、畳表というものの原材料を各地に配って、生産して、それを京都、大坂、江戸という大消費地に売り歩いたというところが、大きな特色です。さらに、非常に大きな店舗を都市部に展開し、海外にも目をむけるといわれます。こうしたことから八幡商人には「自主独立性と先進性」が顕著であるとされています。今日のテーマは、八幡商人の気骨というお話になりますが、自治体としての自尊心、独立心というのは非常に旺盛でした。

城下町から在郷町になった八幡の中で、町人がいろんな自治をつかさどるのです。そのときに代官所に対して申し送りをしたり、陳情したりということも全部、町人がやっていました。こうした状況が物語となったのが『お上にたてつき候』という小説で、徳川家康の朱印状騒動がこの小説の題材です。本日のDVDは、川端家に伝わる『池井蛙口記』がベースとなっていて

岩根 このビデオは40年ぐらい前のものでしょうか、川端さんいささつをご紹介ください。
川端 昭和47年の秋、竹本幸之祐さんに出会ったのが契機で、近江八幡のドキュメンタリーを作ることになりました。竹本さんは、八幡堀の話や当時進んでいた中規模年金保養基地の構想についてお聞きになって、「これは、ぜひとも八幡の気骨を、もう少し表に出して、よみがえらせなきゃいけないね」とおっしゃり「よみがえる近江八幡の会」をつくってみようということに

八幡商人について

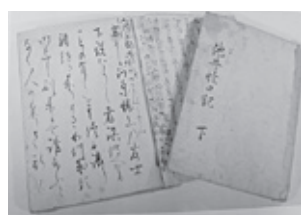
解説 岩根順子(三方よし研究所 専務理事)

近江商人のルーツとして、中世の商人団の「五箇商人」、「保内商人」があり、双方にかかわっていた小幡商人があります。この小幡商人が八幡に移り住み、八幡商人となっていたというのが前回の林先生のお話でした。

日本橋界隈には、西川産業(西川甚五郎家)、近三商事(森五郎兵衛家)、メルクロス(西川庄六家)等々が、いまも日本経済の中核として、日本橋に企業活動を進めておられます。さらに、八幡商人は北海道での漁場開発や東北の山形や福島にも店をかまえています。そして海外にも出た商人として西村太郎右衛門さんや岡地さんなどがおられます。

八幡は幕府の天領であった時代も、朽木藩や尾州藩の領地に転々とした時代も、代官支配の枠組みの中ではあったが、惣の制度、つまり自治の機運が非常に強い土地柄であった。八幡は幕府の天領であった時代も、朽木藩や尾州藩の領地に転々とした時代も、代官支配の枠組みの中ではあったが、惣の制度、つまり自治の機運が非常に強い土地柄であった。

ビデオ『八幡騒動』の概要
た。加えて、近江商人の故郷としての豊かな経済力が、自治の機運をしっかりと支えていたのであろう。八幡騒動に関して現存する唯一の史料が池田町の川端家に伝わる。4代目の薬屋五兵衛の日記、上下2巻である。
時代は飢饉が続く天明六年から七年にかけて、町衆が提案した大胆な町政改革を一人の犠牲者を出すことなく役所に公認させ町民が凱歌を勝ち取った戦いの足跡で、筆者のユーモラスな筆耕からこの騒動が綿密に計画され、確かな見通しを持った余裕のある闘争であったことが伺える。日本でも珍しく勝利した町衆一揆は、近江八幡市民がもっとも誇りえる伝統といえる。
ビデオは川端家10代当主の川端五郎兵衛さんと竹本幸之祐氏との出会いで誕生した。



『池井蛙口記』
左、川端家所蔵の文書で、「池井蛙口」は、チセイ(治政)の愚口というふうにも読める。右は、徳川家康朱印状

ビデオ『八幡騒動』の概要

ハートランド資金会議趣意書

「ハートランドの近江八幡の資金とは、心のふるさと、ふれあいの近江八幡の、よりよきまちづくりを目指して、全て知恵と資金を出し合う市民の活動資金である。個性あるまちづくり、住んで誇りに思うまちづくりこそ、地方の時代の先覚(?)スローガンとして、うたわれながら、すでに久しい。

近代商業の基礎を確立し、世界の雄飛した近江商人を生んだまち、近江八幡。(中略)しかし、先人の残した輝かしい文化遺産や、この美しい風土は、これを正しく受け継ぐ努力を怠ってはならない。

新しい文化への基盤を整備しようとする市民の役割として、正しく認識し、まちを愛する心を持ちたい。そのまちに住み暮らす者としての義務であり(中略)、地方財政の危機と言われるいまこそ、市民が、市民のためのまちづくりに何をすべきかを考え、単に行政にもの申すという考えから、住民主導型として行政と共に考え、知恵と資金を最大限に投資することを、ハートランド近江八幡資金(市民活動資金)会議の趣旨とするものであります。

まさしく自分たちでお金を出そう。市の金には要らないということで、スナックにも、「ハートランド資金」と書いた手づくりの箱が置いてあるという具合で、1,300万円集まりました。その後近江八幡市からの財源もあり、現在は5,000万円の財源がベースです。

財団としての大きな事業はかわらミュージアムの設立がありますが、「八幡塾」の復活も進行中で、先日は安土で開催しています。ベースは、住民が自分のお金と知恵を使ってまちづくりをしていこうというのがいまのハートランド財団の本来の趣旨です。

やがて、ヘドロの堀がよみがり、厚生年金休暇センターや、かわらミュージアムが建設され、

らしいということになったのです。この時、青年会議所の先輩から「八幡堀をどうするか、陳情書をつくれ」という命令があり、「八幡堀は、いままでは流通の大動脈だったけれども、これからは八幡の人間のシンボルにしなければいけない。堀は埋めた瞬間から後悔が始まる。したがって埋める前に残す方策を」という陳情書を書き上げました。その後、役所に日参し、さらに7300名の署名を3日で集め、滋賀県に八幡堀修景計画図をもって掛け合いが始まりました。この修景図は当時京都大学工学部の西川幸治先生に作っていただいたのですが、西川先生を紹介いただいたのが宇野宗佑さんでした。

当時の私たちの運動に対して、「何のためにそんなことをするのか」という人が少なくはなかったのですが、私は、「死にがいのあるまち、都市空間にするためのバックグラウンドになるようなものとして、八幡堀を考えた」と思っていました。八幡堀がなくなってしまうたら、もう一生後悔する。と訴えたのでした。

岩根 自分たちのお金で、知恵で動くというのは、まさしく近江商人の気概ですね。川端 朝鮮通信使の接待にまつわる話があります。近江八幡はそれこそ、諸役御免ということで、通信使の供応に関して負担はなかったのですが、1719年(享保4)に彦根で昼食をされる準備を八幡に沙汰があり、急遽整えたのですが、当時、相当な支出でしたが、誰に請求することも出来ずに、泣き寝入りしていたのでした。ところが、2年後に京都の役所から呼び出しがあり、そのときの必要経費を支払うというのでした。ところが、いまさら受けるのもどうするのだ、ということで結果、合議の上、この金で基金が出来、利息を支払い、基金を増やしていく、「講」のようなものとしたようです。つまりハートランド資金は300年前にすでに八幡では作られていたのだと思っています。

近江八幡は大変貧乏でしたので、われわれで集めたのです。

尾賀 ハートランドは、行政からのお金はもらっていません。

なったのです。そして八幡堀の復活やハートランド資金へと進展していきました。八幡堀が完成したら、この運動のドキュメンタリー映画をつくってあげるとおっしゃっていたのですが、残念ながら、それはかないませんでした。

必要がなくなり、下水などが流入してヘドロが堆積し、近所の人たちは、ヘドロで臭くてたまらないし、市民の人も、とにかく何とかしてくれというような惨状でした。市長選挙や市会議員の選挙での公約の筆頭が、八幡堀問題でした。しかし、わずかな予算しか付かず、誰もが解決できないままに任期を終えたものです。そこで近江八幡青年会議所が立ち上がったのです。昭和44年頃、地元住民の署名運動から始まり、2400名の署名を元に国の認可として堀の埋め立てが始まる

らしいということになったのです。この時、青年会議所の先輩から「八幡堀をどうするか、陳情書をつくれ」という命令があり、「八幡堀は、いままでは流通の大動脈だったけれども、これからは八幡の人間のシンボルにしなければいけない。堀は埋めた瞬間から後悔が始まる。したがって埋める前に残す方策を」という陳情書を書き上げました。その後、役所に日参し、さらに7300名の署名を3日で集め、滋賀県に八幡堀修景計画図をもって掛け合いが始まりました。この修景図は当時京都大学工学部の西川幸治先生に作っていただいたのですが、西川先生を紹介いただいたのが宇野宗佑さんでした。

八幡堀の修景保存が進みました。近江八幡は「本店まち」で情報の再生産をしているところです。「八幡塾」や「よみがえる八幡の会」によって、特性ある都市基盤の整備と豊かな市民性を養っていくことで死にがいのある町を作っていくとしたのです。つまりパーソナリティーの復活です。

ハートランド推進財団 八幡の将来展望

岩根 八幡堀がよみがり、街づくりを推進してきたハートランド推進財団は、いま尾賀さんが理事長をお務めいただいています。

尾賀 昭和58年に任意団体のハートランド資金会議が始まりました。八幡堀の修景保存に始まり、中規模の厚生年金センター建設問題、水郷、西の湖の保全に関係し、近江八幡駅改修時にも「よみがえる八幡の会」が動きました。そういう中で、ただ意見を言うだけではあかん。口を出すなうで出来上がったのがハートランド資金会議です。普通なら、行政に金を出してもらえないかという話になるのですが、当時の近江八幡は大変貧乏でしたので、われわれで集めたのです。



八幡堀

自身で稼いでいかないといいけない組織です。さらに今、八幡では、株式会社まっせを作りました。市の方も出資してくれていますが、資本金約5千万円。これはまったくフリーハンドで、いま市民が運営しています。事務局も、市民の公募です。「まっせ」は、左義長の「まっせまっせ」で、単純な名前ですが、いい名前だと思っています。商工会議所に事務局を置き、かわらミュージアム指定管理者、全てわれわれが運営しています。「まっせ」は、まったく資金的な裏打ちがないので、われわれで稼いでいかないといいけないのです。

ここはあくまでも本店まち。つまり、財務の拠点であり、教育の拠点であり、経営の拠点であって、そういった人たちを育てて、東京、昔の江戸とか大坂かの店に送り込んで商売をしていました。そして、ここにはあくまでもお金を集中させて、どう運営していくかということを考え続けてきたのが近江八幡です。近江八幡では小売りはあまりありません。私の友人が、八幡神社の近くで物をつくっているのです。おまえ、もっと観光客に物を売れよと言ったら、「僕はな、いまま

で、おじいちゃんも、この上もずっと観光客に物売って飯食うてへんや。僕は、八幡の人に、これを使ってもうて生きているんや。だから、これからもせえへん」と。こういうふうな気概を持っているのです。

岩根 八幡の今後が楽しみです。実現しませんでした。が、ちょうどAKINDO委員会が発足した平成元年ごろ、川端さんと盛岡で一緒に、そのときに熟っぽく商業博物館構想をお話しされたのを、いま思い出しました。尾賀 今日面白い資料をもってきました。「昭和2年度特別税個別割合賦課額決議書」というのが出てきたのです。

昭和2年という金融恐慌の年で、取り付け騒ぎなどもあり、特別税を取つたらしいですね。「現住者の所得額および資産の状況を斟酌し、各課税額を定め各自申告せしめんとする」といっています。

近江八幡では、1,584戸あって、その平均が、当時で23円74銭の税金が課せられたとされています。その中でいわゆる御三家が、大杉町の西川甚五郎、新町一丁目の森五郎兵衛、西川庄六の三軒だけが千円以上2881円64銭を課せられています。ちなみに池田町5丁目、ウイリ

アム・メレル・ヴォーリズは、181円です。

川端 当時の八幡商人は江戸の初期から、ずっと大商人に支えていただいていた。そして、これら御三家は、いまも日本橋で元気にやっておられますが、この恐慌時代も、しっかりと納税をされていたのです。八幡商人の中には、残念ながら株で失敗したとか、先祖が遊んでいて、あかんようになったとか。そんな近江八幡商人もいらつしやるが、一般市民の百倍の税金を納めるぐらいの、お金持ちだったということが分かります。

岩根 面白いお話です。

近三、いわゆる森五さんは、村野(藤五)さんの設計なので、ね、そんなことも、『近江八幡市史』の中に記載されています。近江八幡市史は、自治を単独で扱っている珍しいものですが、本日は、その意味がよくわかりました。やはり気骨が満ちあふれている八幡商人でした。

いま、たまたまお話がありました。ヴォーリスさんですけれども、今年は没後50年です。また秋には八幡を中心に、ヴォーリスさんのイベントが展開されるよう、まだまだいろいろな期待できるまちかなと思っっています。(近江八幡会場)

連続講座 (4)

東北・南部藩を支えた高島商人—その発祥と実力の謎—

日時：平成26年9月7日(日)
場所：高島ビレッジ1号館
講師 龍谷大学 窪田 和美 氏



琵琶湖の西岸、高島から南部藩に出かけた高島商人の足跡は現在の高島には、何ら残っていません。どのような経緯で東北に出かけ、郷里との縁を残さなかったのか？ さらに、盛岡で発生した小野組は、明治初頭には日本経済を揺るがす経済力を持ちながら消えていったその要因はなんだったのか？ まずは深まる高島商人の発祥と実力の謎に迫ります。

高島商人との出会い

私は、歴史学の研究者ではありませんし、五個荘の塚本喜左衛門家の歴史を調査したことはありませんが、この場合も経営的手法ではなく、近江商人の企業家精神や宗教意識に関心がありました。今回、高島商人とのご縁も、近江から盛岡に出掛けた村井市左衛門家の文書を自費出版でまとめられた書籍と出会い、それが発端になり、意外な展開になったのでした。

なぜ高島商人は盛岡を目指したか

近江は、全体としては耕作面積が少なく、藩政時代、長男は祖先伝来の田畑を継承できるものの、次男以降は他家の養子になるか、商家へ奉公に出ることが多いため、近江商人を多く輩出しています。

しかし高島商人については、その出自が農民ではなく武士であったことが、他の八幡商人、日野商人、湖東商人と比べて大き

村井市左衛門家は通称「村市」と言いましたが、明治以降は商売を辞めておられ、現当主は大学教授を退官されておられます。どうも近江商人の場合、本業から撤退すると没落したように思われるので先祖のことを話さないようで、公表もされていません。しかし村井さんは、自宅押し入れの葛籠から出てきた古い文書を解読され、近江商人であったことを自費出版で明らかにされたのです。

な違いでしょう。

湖西地域は、湖東地域に比べると、気象条件や地理的条件が農耕に不向きであったことは疑う余地はありませんが、耕作地がないので他国に商いに出掛けたと断定することは出来ません。しかも、この地域から他国に出掛けた商人がすべてと違っていいぐらい盛岡、南部藩であったことに特別の要因があったに

違いないのです。
高島商人の始祖は
浅井家の家臣だった

平成21年8月29日に、盛岡市上津川上の橋西詰河畔に「近江商人来盛四百年記念 始祖 草鞋脱ぎ場」の記念碑が、岩手県人会・近江商人末裔会によって建立されました。

この始祖というのが、村井新七、小野権兵衛、村井市左衛門の3名だとされています。私が高島商人について調査を始めるきっかけとなったのがこの村井市左衛門さんで、通称「村市」と呼ばれていました。

最初に高島から盛岡に出掛けたのがこの3名というのですが、盛岡での史料から、実は彼らより前に盛岡にいった近江の人が



盛岡城



盛岡市上の橋

いたことが判明しています。それは田中清六さんという鷹買い商人で、高島郡田中出身で八幡城築城に尽力した田中吉政の一族で、のちに砂金などの採掘で豪商となった人です。清六は、金買商人だった父とともに北国海運に従事しており、天正18(1590)年頃から北前船を使って地方の大名・豪族とのつながりを持ち、加賀前田家の差し金で南部家を当時の中央政権にとりなすなど、南部信直に京都の情報伝えたり、代理として家康の元に向くなど南部家と非常に近い関係を保っていました。慶長4(1599)年には家康から北国中の諸浦での諸役を免除される扱いを受けています。当時、南部では砂金が産出され、非常に裕福な財政状況でしたが、

清六の活躍があつてこそ南部氏は近世大名になりえたといえます。

南部藩と高島商人

三戸から盛岡にやってきた南部利直は、慶長4(1599)年初代藩主となりましたが、城を中心として城下町を形成するには領内の特産物を領外に移出して経済発展を図る必要があります、その役目を上方の商人に委ねることを考えていました。

当初は北前船商人を城下で優遇することを考えたのですが、交易をはじめると、近江商人には行商を通じて全国的な商取引が可能であることが判明し、さらには清六の働きもあり、南部利直は慶長15(1610)年には、高島郡出身者に盛岡に来ることを勧めました。

大阪冬の陣、大阪夏の陣の兵站が縁となつて

高島商人は、関が原の戦いや2度の大阪の陣に参戦した南部家の兵站を努めたことが一層、南部家との関係が深まり、大阪夏の陣の前年の慶長18(1613)年には村井新七が上の橋に土着したのでした。

一方、南部氏から200石を受ける2代目清六(田中彦右衛

門)は、大阪夏の陣に参陣するなど、高島商人は南部藩との深いつながりの中、次第に盛岡の町での商いを広げていっていたのでした。

南部藩主は近江商人を優遇

盛岡は風光明媚な土地で、南部の生産品としては、米、大豆、材木、生糸、紅花、紫根(紫を染めるための染料になる植物)のほか、大きな財源は砂金や銅という鉱物と南部馬でした。大事な財源を扱った清六が重宝されたのが理解できます。

一方、地形的には、有名な北上川を本流に、草鞋脱ぎ場のある中津川、米内川などの支流があるのですが、たびたび洪水に見舞われました。また厳寒期が長く作物の生育不良や飢餓もあり、大火も多かったようで、南部藩の城下町作りには40年を要したというのです。こうした状況の中、藩主は、領外商人の力を南部藩のまちづくりのために期待し、とりわけ、近江商人を優遇しました。

盛岡大手門付近に商人町を作りますが、苗字、帯刀、袴を許された近江屋(村井)、井筒屋(小野)が軒を連ねていました。村井市左衛門家の歴史を綴った『村井文書』には、袴、打ちかけ姿

の代々の夫妻が記されているのは、高島商人がいかに優遇されているかが理解で出来ます。

南部藩は業種別に商人をランク付けし、古手・呉服・酒屋・米屋・麴屋などの商いをする近江系商人は上層、魚・穀物を商う地元商人を中層、そして中層以下の地元商人に区別し、優遇する反面、藩政への協力をも要請していたのです。初代から4代目までは、馬の売買、金の産出などによって、南部藩は大層裕福でしたが、次第に経済状況は逼迫していくのでした。

南部藩の経済を支えた内和制度

盛岡の近江商人は、南部藩の財政維持を供給する御用商人でしたが、彼らが急速に繁栄したのは元禄期(1684~1703)です。その繁栄の背後には、内和制度が存在していました。

内和とは、一族とか一統としてのまとまりを持った商家集団です。商家に雇われた奉公人が資本とのれんを与えられて、分家とか別家として独立した後に、同じ家から出たということに結束を固める紐帯機能を有する組織のことで、主家のもとに系列化され、内和が複数になると近江商業団と呼称されました。

実際には同族であったり、親族でもあり、あるいは婚姻関係も、当時のことですから、主家同士でお嫁さんのやり取りをしていましたし、婿養子に入ることでもあったと思います。業種を越えて婚姻関係が結ばれることは、この時代は難しかったので、結果的に、人数というか規模は膨らんでいったのだと思います。

この内和中も明治近くになってくると、単に近江出身だというだけで、そこに入れてください、入れてやるよということ、だんだん希薄になってくるのですが、結束を固める内和中、内和制度というものが大きな意味を果たしています。具体的に申し上げますと、御用金を自分のうちだけで、厳しくて賄えないときは、お互いにやり取りして、助けてもらったり、助けたりしています。湖東商人は奉公人が独立した場合は別家といいますが、内和は盛岡独特のものようです。

滋賀出身者で作る滋賀県人会は全国の都道府県に組織され、海外にもいくつかの県人会があります。特に盛岡では岩手滋賀

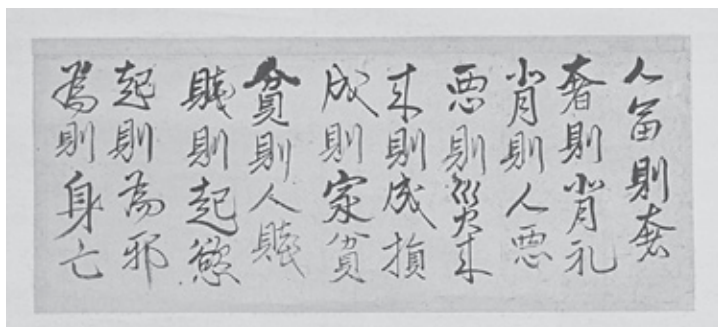


盛岡市願教寺

県人会のほかに近江商人末裔会が組織されていますが、その結束力も強いのですが、こうした独自の制度が影響しているでしょう。

浄土真宗本願寺派「願教寺」と「村市」

本願寺派の北峰山無量殿願教寺というのが本来の名称ですが、一般的には願教寺と言う寺院の墓石の7割ぐらいが近江出身の方で占められているようで、そのことについてお話を進めます。このお寺は、村井市左衛門家の手次寺となっていますが、慶安3(1670)年の創建で、当



村市家の家訓『御遺誠』

初の地は洪水で流され、いまは盛岡市の北山という高台にあります。明治20年、事情があつて住職がおられなくなり、西本願寺本山から島地黙雷さんが願教寺の25代住職としてお越しになりました。当代のご住職も島地さんですが、滋賀の日野町のお寺のご出身で、ご縁があつて盛岡の願教寺のご住職となられました。ここでも盛岡と近江のいろいろなつながりを感じました。盛岡にやってきた村井新七は、上の橋ほとりで近江屋という店を構え、多くの同郷人を迎えます。

す。小野権兵衛は、村井新七の養子になり、明治新政府設立に大きく貢献した小野組へと発展して行きます。そして私が調べた村井市左衛門家は、盛岡を中心に近江屋系村井の主流として盛岡城下で酒屋、質屋、呉服など多岐にわたる販売を行つており、尾去沢銅山の支配仲間を拝命したり、御用商人に仲間入りするなど、万治年間から文化・文政年間には比較的経営が安定して行きました。ところが、後見人の経営のまずさなどが影響して明治18(1884)年取り付けにあつて村市は倒産します。その後、住居を転々としてふたたび盛岡にもどつたのは、明治36(1903)年で、12代村井市太郎さんは襲名しないで鉄道管理局に勤務され、そのご子息の当代村井宏さんは農学博士で岩手滋賀県人会・近江商人末裔会の前会長をお務めになりました。

「人富めば即ちおごる。おごれば即ち礼にそむく。そむけば即ち人ににくまる。にくまるれば即ち災いきたる。きたれば即ち損となる。損となれば即ち家貧し。貧しければ即ち人いやし。いやしければ即ち欲起こる。起これば即ち邪をなす。なせば即ち身亡ぶ」というものを子孫に伝えられました。盛岡の近江商人の特徴を一言で言えば、ルーツが農家ではなかったというのが大きかったのではないかなと思います。南部藩主による誘致と、彼らの生計維持、この両者の目的と利益が一致したということ、盛岡の近江商人と藩主とが当初、win・winの関係でうまくいったのだと思います。ただし、優遇されることに安住できないという意味で、初代の『御遺誠』があつたと思うのです。

しかし、実際には盛岡にきた全ての商人が成功されたわけではなく、中には遠いところから来たにもかかわらず、没落したというケースもあつたでしょう。村市家は、明治期に商家としては倒産しましたが、寺院との関係がかなり緊密でした。代々の当主が几帳面に古文書を全部残しておられた。だからこそ、こういうふうには振り返って見ることもできます。初代は亡くなった妻の供養にと、願教寺の隣地に脇寺を寄進されていいます。その法名を寺院名として妙誓寺とされたそうです。それから後には、願教寺の梵鐘も村市家が寄進しています。10代の直寿さんは、奉公人の年忌を全部調べ上げて、法要を勤められております。当代さんは、昭和60年、初代の三百回忌法要を勤められ、「親鸞聖人行脚像」を寄進されるなど、とても信心深い家柄です。盛岡という町は、何となく京都の雰囲気似ています。ゆつたりしていて、文化の香りがするところなのでしょう。話の方も、東北の中でもゆつくり話されますし、たおやかな感じがします。



盛岡市小野家(登録文化財)



高島市旧小野家(写真は昭和60年当時)

あります。もし機会があれば皆さんもぜひ盛岡にお出かけになればと思います。(窪田講演了)

いよいよ
クライマックス

近江商人の謎に迫る連続講座 とりまとめシンポジウムのご案内

昨年、日野商人(1月)、湖東商人(3月)、八幡商人(5月)、高島商人(9月)をテーマとして、連続講座を開催し、各地の近江商人ファンの皆様とともに、さまざまな角度から近江商人の謎に迫ってきました。そこで明らかになった四商人のイメージをとりまとめ、フレッシュな近江商人像を描き出すため、シンポジウムを開催いたします。基調講演として老舗学の前川洋一郎氏に長寿企業としての近江商人の謎についてお話いただき、パネルディスカッションでは、前川氏、各回の講師と現代の近江商人・中澤氏によるざっくばらんな意見交換をおこないます。各回の参加者、そして初めての方もぜひご参加くださるよう、お願い申し上げます。

日 時 2015年3月22日(日) 14:00～17:00
 会 場 大津市 旧大津公会堂 2階多目的室
 (京阪浜大津駅から徒歩1分/〒520-0047 大津市浜大津1丁目4-1)
 内 容 基調講演「日本型経営の流れからみた近江商人」

前川 洋一郎 氏 老舗学研究会共同代表、大阪商業大学大学院非常勤講師、三方よし研究所会員。著書、新刊『なぜあの会社は100年も繁盛しているのか』(PHP 研究所2015年1月下旬発売、1500円)、『老舗学の教科書』。

パネルディスカッション「近江商人の謎に迫る」

満田 良順 氏(日野商人館)
 林 純 氏(東近江市近江商人博物館(五個荘))
 岩根 順子 氏(三方よし研究所専務理事、サンライズ出版)
 窪田 和美 氏(龍谷大学)
 前川 洋一郎 氏(老舗学研究会共同代表)
 (司会)中澤 実任盛 氏(三方よし研究所副理事長、ナカザワグループ)

参加費 1,000円(定員50名)
 懇親会 午後5時30分から、同じ建物内の大津 Grill(和フレンチ)にて、希望者で懇親会を開催いたします。ご参加ご希望の方は、お申し込みの際に、お知らせください。
 ※参加費は別途5,000円 ※2月27日以降は所定のキャンセル料が発生しますのでご注意ください。
 お申し込み ご氏名、ご住所、電話・ファクス番号、電子メールアドレスを明記のうえお申込みください。
 (研究所関連のお知らせを送らせていただく場合がございます。)

三方よし研究所 事務局 電子メール: office@sanpo-yoshi.net FAX: 0749-23-7720 電話: 0749-22-0627
 郵送: 〒522-0004 滋賀県彦根市鳥居本町658番地

連続講座 近江商人の謎に迫る ご参加申込書

Fax. **0749-23-7720** メールアドレス **office@sanpo-yoshi.net**

ご住所 〒 _____
 ご氏名(参加人数) _____
 ご連絡先 TEL _____ FAX _____
 メールアドレス(お持ちの方) _____

てんびん棒

NPO法人三方よし研究所は創設して10年余が経過し、一昨年には記念式典を開催したが、研究所と命名したことから、「そちらでは近江商人について随分研究が進んでいるのでしようね」とお訊ねいただくことが多い。ところが、私たちは、自らは研究者ではないので、これまで発表されてきた成果に基づいた活動を展開したり、研究成果の代弁者として各地で報告する活動を行っている。ただ、近年韓国や中国の企業家にみなさんから企業の永续性、企業の社会貢献、社会に受け入れられる商いについて学びたいとの要請があり、何度か出前講座に招かれたり、来日された企業家や留学生との交流が活発になってきた。

日本は、世界のなかで永续性のある企業の存在が最も多く、しかも企業存続年数も数百年の企業が少なくないことが海外から注目されているという。今回の公開講座とりまとめの会では、長年老舗の実態調査を進める会員の前川洋一郎さんの基調講演がある。「近江商人」と「老舗」という興味あるテーマでどのような展開になるか大いに期待したいものである。